「日本人」

——再び「外国人学校制度」について——

上野昂志

河の上に建てられた粗末な家と、それらの家々をつないで縦横にかけわたされた板の通路にびっしりと群がった原住民の子供たち、彼らの好奇の眼差しの中で焦燥にとりつかれて歩きまわるひとりの白人、それは、『文化果つるところ』という古い映画のショットだが、そこには原住民と白人との間の断絶が鮮かにうかびあがっていたような気がする。子供たちの笑い声も言葉も、主人公である白人にとっては全く意味のわからない、又、それだけに無気味なものであった。常に支配者として「文化果つるところ」にのりこんでいく白人と、それを不可避的に受けいれる土着の人々との視線がぶつかりあう瞬間を、キャロル・リードは見事にとらえていた。

とはいえ、そこでとらえられているのは、白人の眼差しの中にある原住民の無気味さであって、原住民の眼差しの中にある白人の姿ではなかった。原住民はやはり見られる存在として、即ち、客体として白人の前にあるものだったのである。白人が、自らも又、見られる存在であることを原住民の視線の前ではっきりと悟るのには、原住民の独立運動を待たねばならなかった。

ところで、最近この島国では、「ニッポン」とか「日本人」とか「日本民族」という言葉が、テレビのコマーシャルから、外国帰りの評論家、学者先生の書いたものにまでしきりととびだしてくる。「日本人」の中での「日本ブーム」、結構なことだ。だが、そのような喧噪の中で、真似ごとにでも「日本人」と言おうとすると、どうも言葉が喉にひっかかってうまく発音できない。無理やりにその言葉を舌の先に押しだすと、何とも奇妙なアクセントがついてくる、困ったものだ。

「日本人」それは一体誰のことだ。

「社会の時間、歴史を習っていた。その時先生が「朝鮮征伐」という言葉を口にしたとたん、みんなは「朝鮮、朝鮮」とワアワア騒ぎだした。女の子も口を大きく開けて、ゲラゲラ笑いだしたが、先生は止めようともしないで、一緒に笑っていた。その時私はみんなが私を見てやしないかと周囲をキョロキョロ見廻しながらも、みんなと一緒に笑っていたのである。」

（「日本学校から編入してきた生徒作文集」中級三年、梁在順。日本読書新聞編『朝鮮人』からの孫引き）

「私はみんなが私を見てやしないかと周囲をキョロキョロ見廻しながらも、みんなと一緒に笑っていたのである」という記述は恐ろしい。「朝鮮」という言葉だけで笑いだす「日本人」の中では、「朝鮮人」は常に「みんな」に見られることを恐れねばならない、そして、「みんな」

と違うことを悟られないために「みんな」と一緒に「朝鮮」を笑わねばならない。「日本人」の中に同化して生きる「朝鮮人」は全てこのような自己内部の分裂に直面している。「朝鮮人」である自分と、「朝鮮」を笑う「日本人」を演ずる自分との分裂。しかし、この作文を書いた時、筆者は内部の分裂を統一的に見る視点を獲得している。その視点を獲得するためには、「日本学校」から「朝鮮学校」に編入することが必要であった。即ち、「日本」から自らを隔てることが。ここにおいて、自己の内部の「日本人」を否定の契機として、見られている「朝鮮人」から見られると同時に見る主体としての朝鮮人へ至る道が開かれたはずである。

だが、「朝鮮」という言葉を耳にするや否や笑いだす「日本人」はどうか。いや、笑うか笑わないかは問題にならない、形容詞の全くいらない「日本人」はどうか。善良であろうとなかろうと、私は「日本人」につけた括弧をはずす気にはなれない。私も含めた「日本人」は、現在もなお「相手に見られずに見る」という特権」を「朝鮮人」に対して行使しつづけているのではないか。「日本人」個人が朝鮮蔑視するかしないかにかかわらず、「日本人」の存在それ自体が「朝鮮人」を差別していることに変わりはない。それは、「朝鮮人」だからという理由で就職を拒否されてきた無数の人々を想い起こせばすぐに理解できるだろう。「日本人」の存在が「朝鮮人」を拒否させるのである。そして、そのように朝鮮人を括弧でくくりつけてきたことが、そのまま日本人を括弧づけることを意味する。かくして、現在この島国には「日本人」と「朝鮮人」が存在しているのである。

だが、日本の中の「朝鮮人」が、一瞬たりとも忘れることのできない「日本人」の眼差しによって、絶えず自己の括弧を、意識しつづけてきたのとは逆に、「日本人」は自分の手で自分に課した括弧に無自覚なようだ。自分の括弧に無自覚である限り、「日本人」は否定的なものでありつづけるしかしようがない。言ってみれば、何か忌わしいものに過ぎないのである。

ここ二、三年外国へ行ってきた「日本人」たちが、しきりと「日本人」のことを考えているようだが、それは外国人の眼差しの中で始めて見られるということを経験したからであろうか。とはいえ、この島国にいて自らが括弧づけられていることを悟らない者が、のこのこ外国へ出掛けて行ったところで、一体何を見ることができるというのだ。彼らの「日本」観や「日本人」観には60万にのぼる在日朝鮮人への眼はない、従って、他者として宙吊りになっている「日本人」にも気付いていない。又、それだからこそ「日本」の純種性などということを小賢し気に振りまわせるのだろう。二番煎じの「空さわぎ」。

私たちは現在、否定的な「日本人」でしかない。そして、そのことを前提にしない「民族意識」は一切欺瞞である。

否定的な「日本人」であることを超えていくためには、私たちは私たち内部の「朝鮮人」をその否定の契機とするほかないが、更にそれは、明治から敗戦まで一貫して朝鮮から朝鮮人を、朝鮮人から朝鮮を奪いつづけ、戦後は一九四九年の在日朝鮮人連盟、在日朝鮮民主青年同盟を解放させて以来、現在の「外国人学校制度」まで、朝鮮人を圧迫しつづけている「日本」を否定することにつながるはずである。

（67年5月16日）

カムイ伝が第1回から入手できます！

愛読者の渇望に応えてバックナンバー再版

第１冊～第５冊（第１回～第10回）頒布中！

早やも二年余の歳月を数えた白土三平先生畢生の
大作「カムイ伝」を第１回からこの機会にぜひ！

―カムイ伝再版促進会―

カムイ伝の第１回から第12回までを、６分冊にして再版中です。
第１冊（カムイ伝①②）から第５冊（⑨⑩）までは既に頒布中で、
第６冊（⑪⑫）は、６月下旬に発行いたします。ただし、これは、
希望者頒布・限定出版で、書店では一切発売しておりませんので、
誌代（送料含む）を添えて、直接下記へお申込み下さい。
なお、５分冊とも「ガロ」の本誌と同じＢ５判です。

頒価 各冊 230円 〒20円（切手も可・但し１割増）

申込先・東京都千代田区神田神保町１－55　青林堂内　カムイ伝再版促進会

切手代納の場合は、なるべく15円切手をお送り下さい。

〈ガロ〉特別セール案内

バックナンバーの部

今、全国で爆発的な人気を呼んでいる白土三平の大河マンガ<カムイ伝>は39年12月号から本誌に連載されていますが、これをはじめからお読み下さる方々のために、バックナンバーの特別割引セールを実施中です。

「カムイ伝・在庫セット」
41年４月号～42年１月号
10冊・１組　特価 1,300円
（〒１組・100円）

セットのほかに、１冊でも分売いたします。ただし、40年11月号までは品切れです。（１冊送料共150円）

新刊予約の部

月刊雑誌“ガロ”を、少しでも安く、しかも続けて読みたい方々のご要望にこたえて、次の通り特別予約セールを実施いたしております。

〈Ａコース〉　６カ月分予約前納の方には、800円に割引の上、「白土三平傑作選集」（130円）を無料進呈します。

〈Ｂコース〉　１カ年分予約前納の方には、1,600円に割引の上、白土三平の単行本を１冊無料進呈いたします。

★郵便料金の値上げに伴い、今後のご予約には送料（Ａコース・100円、Ｂコース・200円）を申し受けることになりましたのでご諒承下さい。

申込先・東京都千代田区神田神保町１の55　青林堂